

完新世の堆積物から得られた菌類遺体の 形態分類と古環境指標としての有用性

氏名：門馬彩里

要旨

菌類遺体とは、地質時代に生息していた菌類の痕跡であり、現生の菌類に関する知見との比較を通じて、菌類の環境への適応や系統進化の過程を明らかにする重要な手がかりとなっている。調査地のひとつである山梨県七面山は、日蓮宗と密接な関係を持つ山で、また、山は崩壊が発生しやすく「七面山大崩れ」という大規模崩壊現象で知られている。七面山の頂上には敬慎院があり、その建物の裏に広がる一ノ池には珪藻土が堆積し、それを掘り起こし、洗浄して乾燥させたものを「御土」と称し、参拝者に授与している。この「御土」は、皮膚の傷に塗ると効果があるとされ、熱冷ましやマラリアにも効能があったとされる。一ノ池の土壌の堆積構造は、池底堆積物 70～190cm は珪藻土で構成されており、また、珪藻土の下部にある池底堆積物 190～350cm は泥炭質シルトで構成されていた。これらの土壌やそこから検出された堆積物から年代測定を行い、完新世のものであると分かった。産出した菌類遺体は子囊核のみならず菌糸や胞子も確認でき、それらの形態的特徴から *Botryosphaeria* 様菌類であると推定した。また、植物遺体が多く産出し、オオシラビソの葉やスギの球果、トウヒ属の球果なども産出し、これらの情報から一ノ池の形成過程や古環境の推定を試みた。また、千枚岳は七面山同様に地すべりが高頻度で起こる大崩壊

地として知られており、その地すべりでできた駒鳥池で調査を行った。この池は、水量が少なく、池底堆積物 35 cm までは現生のミズゴケが堆積しており、その下部は泥炭、泥炭質のシルトで構成されていた。この調査地では、菌類化石の産出を確認できなかったが、オオシラビソの葉や茎が複数産出し、地学的な要素も含めて池の形成過程や古環境の復元を試みた。この研究では、菌類遺体が古環境の指標として適切であるかどうか、また、菌類遺体が見出すことのできる環境は稀なものなのか普遍的なものなのか議論している。